

セロ弾きのゴーシュ水車小屋の新旧平面

A Study on the Reconstruction: the Old and New Plans of
the Gorsch as the Cellist's Water Mill House

水 野 信 太 郎*
Shintaro MIZUNO

I. は じ め に

本稿は宮澤賢治（みやざわ・けんじ，1896～1933）の童話「セロ弾（ひ）きのゴーシュ」に登場する主要な建築物であるゴーシュの自宅“こわれた水車小屋”を具体的な建築空間として構築する試みである。その基本方針は、賢治の原作童話を最大限に尊重することにある。くわえて現存する賢治ゆかりの建築物および文献類など他の要素をも鑑みるものとする。このように多面的な諸作業を重ねることによって、当研究の結論としてゴーシュが住む水車小屋の平面図（プラン・間取図）を提示する。その結果「ゴーシュのこわれた水車小屋」と称される彼の自宅が、工学技術史的な学問上の視点から見ても少なからず合理性を備えた建築物である点を指摘するものである。

宮澤賢治作品の中でも「セロ弾きのゴーシュ」という童話は特に、読後の爽快感あるいは達成感に満ちた結末を迎えることができる明るい作品である。その意味においては、この作品こそが賢治童話の代表作という考え方が出来よう。少年少女向けの童話作品として親しみやすく、好ましい。そして教訓的な面も強くない。宗教色も皆無である。「セロ弾きのゴーシュ」が、詩人であり童話作家であり教育者であり科学者であり宗教家でもあった宮澤賢治の願望を表現した世界なのである。つまり作中のゴーシュは、賢治自身の理想像であった。

異説があるものの宮澤賢治が「セロ弾きのゴーシュ」を執筆したのは、昭和6（1931）年と推定される¹⁾。同じ年に童話「風の又三郎」も書かれたと考えられている。この年の11月3日には有名な詩である「雨ニモマケズ」が手帳に記された。広く知られた「雨ニモマケズ」の内容から理解される通り、当時の賢治は身体をこわし、このため「丈夫ナカラダヲ」もちたいと熱望していた。しかし、それは現実とはならなかった。

だからこそ「セロ弾きのゴーシュ」中で、楽長から演奏会終了の直後

「ゴーシュ君、よかったぞお。あんな曲だけれども、ここではみんなかなり本気になって聞いていたぞ。一週間か十日の間にずいぶんあげたなあ。十日前とくらべたら、まるで赤んぼうと兵隊だ。やろうと思えばいつでもやれたんじゃないか、きみ。」

と言われ、さらに

なかまもみんな立ってきて、

「よかったぜ。」とゴーシュにいました。

*北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科

「いや、からだがしょうぶだからこんなこともできるよ。ふつうの人なら死んでしまうからな。」

と楽団員たちから称賛されるのであった。

この最後の言葉にあるように、身体が丈夫だからこそ、夜も寝ないでチェロの練習に明け暮れることができるということなのである。そのような体力を宮澤賢治は強く欲していた。「雨ニモマケズ」の中で高々と詠いあげられている「丈夫ナカラダ」そのものであった。

なお余談ながら「セロ弾きのゴーシュ」から少しのあいだ離れて、「雨ニモマケズ」に触れておきたい。この手帳に関してあまり知られていない事実がある。賢治が没した翌年である昭和9年（1934）に、東京で

宮澤賢治の弟清六が上京するのを機に、新宿の帝都座地階のモナミで、賢治を追悼する文学者たちの集まりがもたれました。「雨ニモ^(ママ)負ケズ」の手帳が発見されたこの会に南吉も出席し、詩集『春と修羅』、童話集『注文の多い料理店』、法華経一卷を贈られています。

南吉は、巽聖歌を通して賢治に関心を持ったようです。同じ岩手県出身の聖歌には賢治から前記の詩集や童話集が贈られていました（後略）²⁾

という文学者仲間の会合が開催された。この「第一回宮澤賢治友の会」（昭和9年2月16日）の集合写真には、宮澤清六を中央にして、詩人で彫刻家の高村光太郎や詩人の草野心平、童謡詩人の巽聖歌らと並ぶ東京外国語学校在籍中の新美南吉が姿を見せしている。今日、童話作家として宮澤賢治に次ぐ大きな存在となっている新美南吉に、賢治作品が清六の手を経て直接届けられていたという史実が残されているのである。

さて「セロ弾きのゴーシュ」のストーリーに戻る。深夜ゴーシュは音楽修業を続けるのだが、その連夜のレッスン内容は次のようなものであった。まず第一夜、はんぶんじゅくしたトマトを土産代わりに持って三毛ねこが「トロメライ、ロマチックシューマン作曲。」なる曲を聞いてあげる、とやってくる。ねこによると、音楽を聞かないとねむられないのだそうである。音楽は心のため日常生活に不可欠だと主張しているようだ。

二晩目には、かっこうが現れる。「音楽を教わりたいのです。」「ドレミファを正かくにやりたいんです。」と依頼する。しかも「あなたのはいいようだけれども、すこしちがうんです。」と指摘する。最初ゴーシュは腹を立てるが、演奏を続けるうち「鳥のほうがほんとうのドレミファにはまっている」と気付く。つまりフレットがない擦弦楽器（さつげんがっき）であるチェロの音程のとり方をゴーシュは、かっこうから学ぶのであった。

宮澤賢治ではなく石川啄木関連の文献であるが、かっこうに関する興味深い記述がある。以下に引用する。

閑古鳥は初夏を告げる渡り鳥である。カッコー カッコーとその声は緑の山野にものがなく響きわたる。鳴き声の印象によるのであろうか、岩手にはこの鳥にまつわる悲話が多い。例えばこの鳥は口から血が出るまで自分の名を鳴くのだという。真夜中でも鳴き出すことがある。雨ふる夜のこの声は、とりわけ切なげにきこえる³⁾。

という。啄木と同郷の賢治が上記のような伝承を耳にしていた可能性は大きい。

第三夜は、たぬきの子が二本のぼうき（ばち）と『ゆかいな馬車屋』という楽譜を背負って訪れ、「ぼくは小だいこのかかりでねえ。セロへ合わせてもらってこいといわれたんだ。」とのこと。「ゴーシュさんは、この二ばんめの糸をひくときはきたいにおくれるねえ。なんだか

「よくがつかずくようになるよ。」「いやそうかもしれない。このセロはわるいんだよ。」またしてもゴーシュは自然界の動物から音楽を教えられる。打楽器担当のためきからは、音楽の三要素のひとつリズムを伝授された。

さらに最終夜となる第四夜は野ねずみの母子が訪ねて来て、この子の病気をなおしてほしいという。ゴーシュがチェロを演奏することによって「からだじゅうとても血のまわりがよくなって、たいへんいい気持ちで、すぐになおる方もあれば、うちへ帰ってからなおる方もあります。」この会話から宮澤賢治が、今日の音楽療法という医学上の実利的な有効性を予言していたかのようにも感じられる。

II. これまでの作品群

童話「セロ弾きのゴーシュ」に物語の舞台として登場する建築物は、町の活動写真館と、町の公会堂と、ゴーシュの家、の3棟だけである。本研究の主題として設定したゴーシュの家は、(前略)じぶんの家へ帰ってきました。家といっても、それは町はずれの川ばたにあるこわれた水車小屋で、ゴーシュはそこにたったひとりですんでいて、午前は小屋のまわりの小さな畑で、トマトのえだを切ったりキャベジの虫をひろったりして、ひるすぎになるといつも出ていっていたのです。

と描写されている。

筆者は幼いころからこの童話を読むたびに、そのゴーシュという片仮名表記の主人公の名から連想したためか、決まって西洋式の建築物を想像してきた。しかもそれは水車小屋ではなく、時には西洋の風車を夢想してしまう事さえあった。しかし正確には、あくまでも川ばたにある水車小屋なのである。その上、こわれた水車小屋と明記されている。

さてゴーシュの家に関しては、これまで外観あるいは室内のようすが、幾冊かの書籍に描かれてきた。それらは児童文学書の挿絵や絵本を構成する絵画であった。前述した筆者幼時の漠然とした思い込みの当否を確認・訂正する目的から、「セロ弾きのゴーシュ」自宅像の先行作品を可能な範囲において収集することとした。以下紙面を割いて、書籍の発行年代順に見ていきたい。

もとより管見に過ぎないがゴーシュの家を写真-1⁴⁾から同-18²¹⁾に、一連のものとして掲げる。写真-1は芥川龍之介・萩原朔太郎・室生犀星・菊池寛らなどとも交流のあった画家の作品で、年代的にはかなり遡るものの、残念なことに建築物に関しては描き込まれていない。写真-2は、静かで寂しげな印象を与える林の中にたたずむ水車小屋の外観である。屋根葺き材料は、萱(かや)であるのか板であるのか判然としない。だが板葺きの小屋であると見るのが順当であろう。そして水車の形は日本の各地で普通に見られるものである。宮澤賢治の原作中に登場する月も姿を見せている。写真-3が初めて室内の様子を知ることのできる作品の一つである。印象としては洋風の感が強い。そして留意したい点は、写真-19に示す現在の「賢治先生の家」かつての羅須地人協会の1階に残されている教室を思い起こさせることである。勾配屋根を頭(あらわ)にした天井、その天井の軒に近い部分が一段低くなっている点などから、筆者には当該作品から賢治先生の家：かつての羅須地人協会の建築物が記憶によみがえってくる。当該建築物に関しては、筆者は実測調査を終えており、その詳細を後述する。なお写真-3の右側面背後には、水車が放置されている。

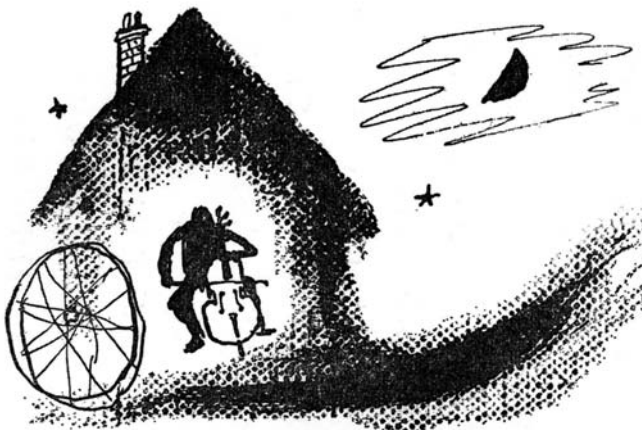
写真-1 小穴隆一⁴⁾の作品写真-2 佐伯義郎⁵⁾の作品写真-3 遠藤てるよ⁶⁾の作品写真-4 茂田井武⁷⁾の作品写真-5 おきの かく⁸⁾の作品写真-6 田代三善⁹⁾の作品



写真-7 太田大八の作品¹⁰⁾



写真-8 小林敏也の作品¹¹⁾



写真-9 山川直人の作品¹²⁾

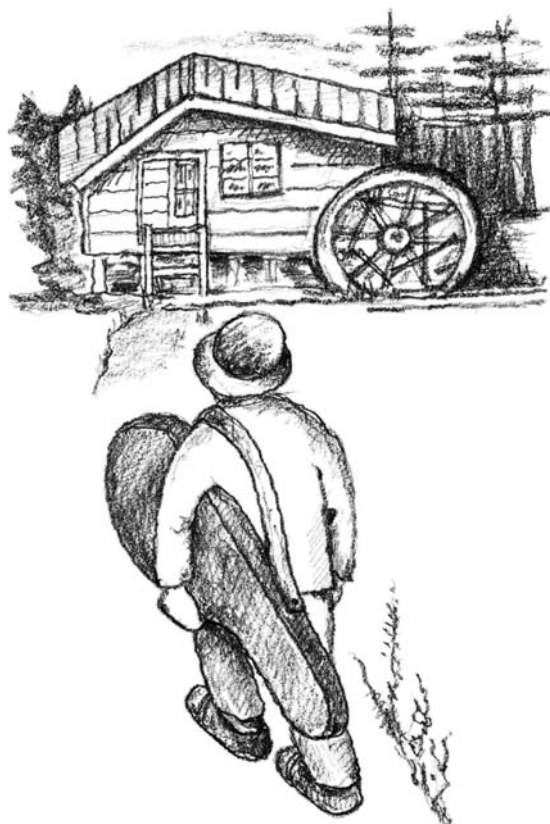


写真-10 小野かおるの作品¹³⁾



写真-11 畑中 純の作品¹⁴⁾



写真-12 いもと ようこの作品¹⁵⁾

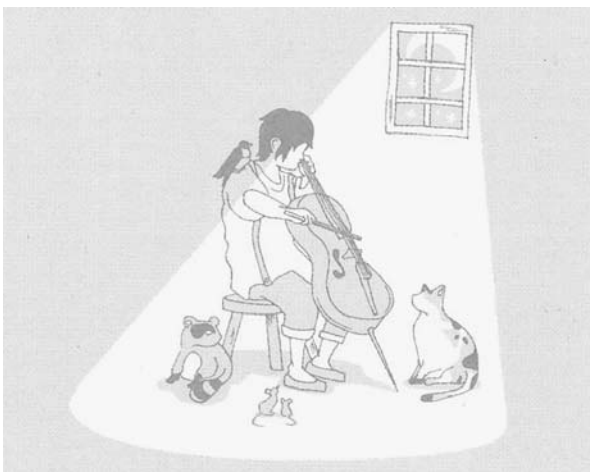
写真-13 徳田秀雄の作品¹⁶⁾写真-14 湖東美朋の作品¹⁷⁾写真-15 名倉靖博の作品¹⁸⁾写真-16 さとう あやの作品¹⁹⁾写真-17 柴田美里の作品²⁰⁾写真-18 佐藤国男の作品²¹⁾



写真-19 羅須地人協会の教室

写真-4は、2晩目にドレミファを歌いに来たかっこうが明け方、窓から飛び出して去った時の状況である。足元のこわれた窓枠の形を見ても和洋いずれかを特定する根拠とはなりにくい。だが同絵本に見られる村落の景観や楽団員そして聴衆の容貌からは、物語の舞台として明らかに日本が設定されていることが理解される。写真-5には煉瓦を積みあげて築いた煙突が見られる。この煙突頂部の形態から、ひとまず洋風の建築物であろうと判断される。また左手の屋外には水車が描かれている。水車小屋の右上空には上弦の月が浮かんでいる。写真-6の室内のようすも、写真-4と酷似している。あるいは写真-4をオリジナルとした上で、10年後に再び作品化された可能性が推察される。この作品からだけでは国籍を知り得ない。写真-7は、ゴーシュがチェロの練習をしている情景で、自宅内の狭い視角・範囲だけが映像化されている。建築的には背面に窓が見られるのみであるが、その窓枠から判断する限りにおいては洋風の納まりで、扉式の開き窓か、あるいは全く開閉することが出来ないfix（フィックス・はめ殺し）窓のように描かれている。写真-8は童話の最終章であり、その場面を水車小屋の全体像として示している。このラストシーンにおいてゴーシュは、

（前略）まどをあけて、いつかかっこうのとんでいったと思った、遠くの空をながめながら、
「ああかっこう。あのときはすまなかったなあ。おれはおこったんじゃないんだ。」
といました。

となる。なお写真-8では、こわれた水車小屋という賢治自身の文章を尊重しての配慮と思わ

れる建物左右の表現が丹念である。右手には控え柱（ひかえばしら）つまり支え棒（つかえぼう）、左側には明らかに使用不可能となってしまった水車の古材が部分的に残っている。ただし窓の開閉状況からは、和風の意匠（いしょう・デザイン）が見てとれる。

写真-9からは、明らかに和風の引違い窓（ひきちがいまど・2枚の建具が左右に相互スライドする）であることを読みとることができる。写真-10が山荘を思わせる外観の意匠で、建築物の躯体から完全に離れてしまった水車が右端に置かれている。写真-11では、窓のめし合わせ（建具と窓枠の関係・納まり）から判断して和風建築の一部分に、しつらえられた洋間が見てとれる。窓は和風の引違いであるが、この部屋だけは板の間で椅子式の洋間つまり西洋式居室なのである。この建築物の所在地は日本国内であろう。

写真-12、この絵画からだけでは洋風・和風いずれとも言い難い。この絵本全体を詳細に精査しても、和洋いずれかの立場を明示するような表現は見当たらなかった。ただし当該写真の外観作品は、草屋根の水車小屋として描かれている。草屋根（くさやね、または「くずや」とは、茅葺き（かやぶき・萱葺き・すすきの茎）あるいは、その他の例えば藁葺き（わらぶき）など広範な植物性の屋根葺き材料を総称する民家である。なお当該作品からは一見、雪げしきかと受け取られかねないが、物語の季節は夏の夜である。写真-13背後の窓は、左右に開くことのできる両開き窓であろう。したがって洋風の建築物である。写真-14の外観からは、弱い洋風の印象を受ける。しかし室内の左端に見えるガラス窓が上げ下げ窓として設定されているように思える。そうであるのならば、明らかに洋風の窓となる。

写真-15の作品は、宮澤賢治の文章だけを根拠として創作された絵画ではない。他の童話をも含む全賢治作品の世界観に基づいて、ゴーシュのチェロから建築物を造形した近代の光景である。水車小屋は作品中の右上に建つ。写真-16は和風である。そして同書中の活動写真館から連なるまちなみも和風建築群として描かれている。しかも同作品群は賢治の実家付近を含めた花巻の古写真に準拠した姿が作品化されているようだ。その証拠に巻頭において「IHATOV 活動写真館」が明示される。しかも電柱に「花巻15」という住所表記と「宮澤商会」の広告・名盤が描かれている。

写真-17は、この作品も写真-7と同様である。建築的な情報は、椅子のある生活様式と唯一の窓だけに限られている。窓は、はめ殺し状態であろうか。それとも開き窓であろうか。いずれにしても洋風である。写真-18の全体としては、和風の印象を覚える。とりわけ窓割りなどからは和風の印象が強い。しかし洋風の要素が皆無ということでもない。たとえば外装には下見板張（したみいたばり）が施されている。なお、この絵本全体の他のページを見渡しても和洋の判断を下す明快な証拠は見当たらない。ただ別件ながら写真-18には明示されていないものの、他のページに見られる作品には複数個所において屋根面に草花が植えられており興味深い。

以上、先行作品群を見てきた。その結果、ゴーシュの舞台が日本国内に設定されているのか、それとも海外における物語として描かれたのかについては意見が分かれるようである。結果として本研究で扱った18の図からは、洋風と判断することができるものが8例、和風は6作品そして不明が4点であった。なお宮澤賢治が、ふるさと花巻のまちで実際に目にした西洋館として現存している建築物は、鍛冶町の宮澤商店と同敷地奥のレンガ倉と油倉庫、御田屋町（おたやちょう）の旧菊池捍（きくち・まもる、1870～1944）邸の4棟であろう。

本稿では写真を割愛したが、掲載した作品群以外にもゴーシュの世界を描いた画家たちは少

なくない。赤羽末吉（偕成社 1989年）、綾幸子（GALERIE Malle 2016年）、飯野和好（角川文庫 表紙）、ささめや ゆき（岩崎書店）、沢城みゆき、スガハル、高畑勲（徳間書店）、たちもと みちこ、司 修、藤城清治（講談社 2012年）、本間ちひろ（にっけん教育出版社 2004年）ほかである。

ちなみにゴーシュ：Gorschという名は、あまり上手ではない演奏者を意味したり、または左ききの演奏家を、このように呼ぶことがあると聞いている。このヨーロッパ語圏の主人公名ゴーシュによって、彼の生活圏が西洋諸国のどこかの場所であろうと連想してしまいがちだ。物語の舞台を日本ではなく西洋に設定することに関して、ゴーシュの名前が洋式・洋風であることの影響力は小さくない。

ただし「ゼロ弾きのゴーシュ」の舞台設定としてヨーロッパ諸国だと仮定すると、理解しがたい点もある。まず1点目は、チェロがあまり上手ではなかったゴーシュを活動写真館のオーケストラが採用するであろうか。西欧圏ではチェリストの層は厚い。

より明確な日本的事情も隠されている。第四夜、野ねずみの母親は「(前略) パンというものは、小麦の粉をこねたりおしたりしてこしらえたもので、ふくふくふくらんでいて、おいしいものなそうでございますが、(後略)」と答えている。いくら野ねずみであろうとも到底、西洋に棲む動物とは考えられない。近代を迎えたわが国のいずれかの片田舎における生活感に相違ない。しかも野ねずみなどではなく、むしろ日本人による当時の実感なのであつたらう。

Ⅲ. 復元平面の根拠

以上のような考察の結果、ゴーシュが生活する土地を日本国内と判断した。本研究において筆者は「ゴーシュの家」の平面図を木版画2葉で制作した。図-1 ゴーシュ居住以前の水車小屋ならびに図-2 ゴーシュが住む元・水車小屋である。前者はゴーシュ自身が住み始める以前の、現役時代の水車小屋である。この施設内で穀類を搗いていた当時のようすである。後者は、まさしく「こわれてしまった後の水車小屋」で、今はゴーシュが住んでいる。彼はこの市街地から離れた家で、毎晩訪ねてくる動物たちと夜通しチェロの練習をする。騒音が近隣への迷惑となる心配が全くないほど、近くに人家がない環境なのであろう。

今回ふりかえると筆者の当研究における態度は、童話作家・宮澤賢治をクライアント（依頼主・顧客）として個人住宅の設計をする行為のようでもあつた。具体的には、賢治からの依頼内容つまり要求事項が、彼の文学作品である「ゼロ弾きのゴーシュ」原作中に詳述されていると考えた。換言すれば故・宮澤賢治から「原作にある通りのドラマを展開することができるプランを設計してくれ」という依頼を筆者が受けたのである。ただし今回の設計内容は新築ではなく、既存建築物を活かしながら改修工事を進めるためのレストレーション計画であつた。しかも水車小屋から独立専用住宅への用途変更を含む再利用のための設計行為である。

たとえば原文には具体的に、次のような建築的な規定が記されてある。

ゴーシュはそこにたったひとりですんでいて、
とあるので多くの部屋数は必要ない。また、

それはなんでもない、あの夕方のごつごつしたゼロでした。ゴーシュはそれをゆかの上に
そっとおくと、いきなりたなからコップをとって、バケツの水をごくごくのみました。
この文章から、おそらくゴーシュにとって最上の財産つまり重要な家財はチェロであろうこと、そしてその居室は床張りであること、加えて室内には柵がとりつけられていること、さらに井

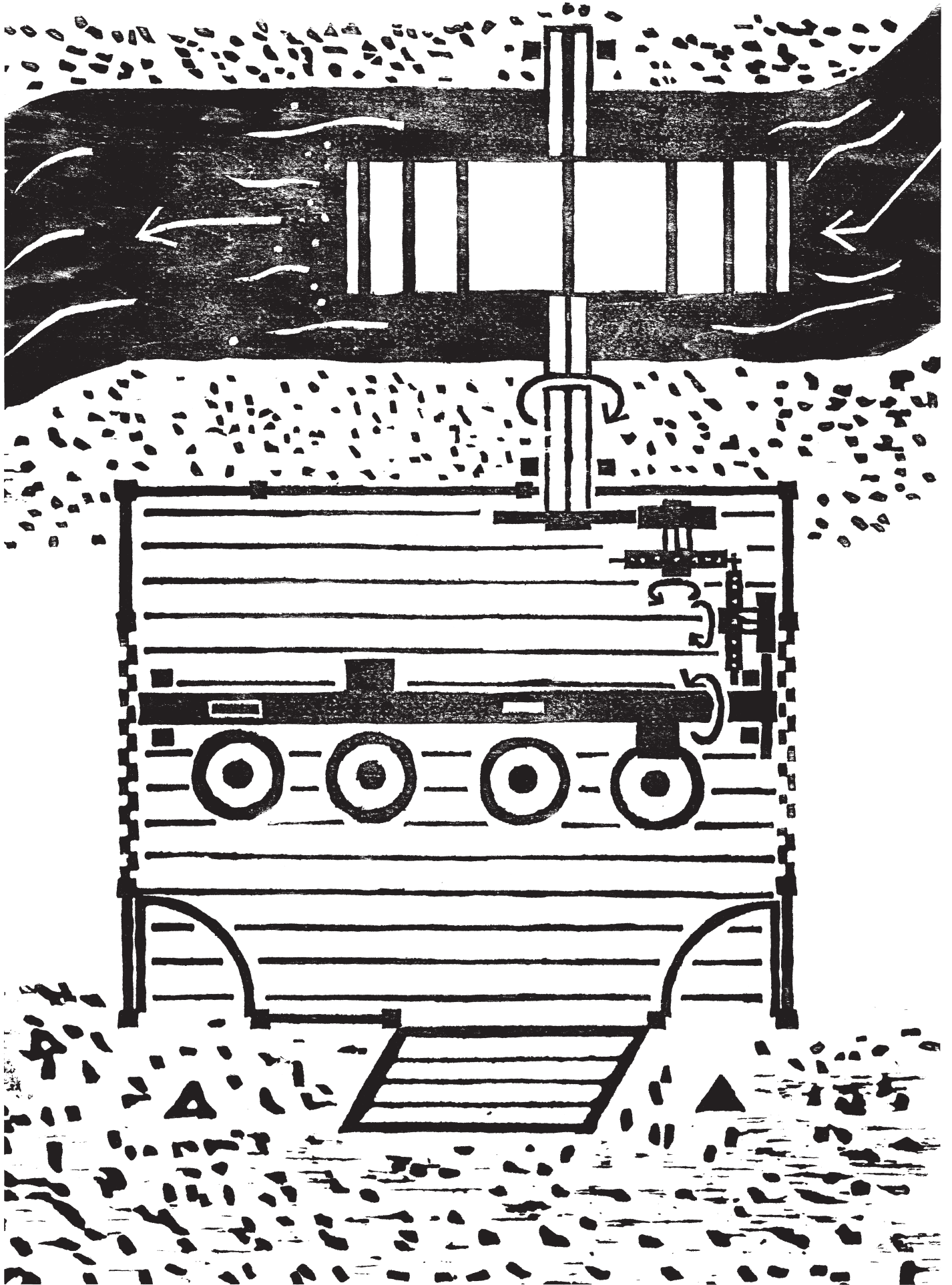


図-1 ゴーシュ居住以前の水車小屋



図-2 ゴーシュが住む元・水車小屋

戸あるいは水道設備は不明であるが飲料水を満たしたバケツが常備されていること、などを読みとることができる。ちなみにゴーシュが左ききのチェリストである可能性に準拠して、弓(ボウ)の向きを通常とはあえて逆に描いた。

そのとき、だれかうしろの扉をとんとんとたたくものがありました。(中略)ところがすと扉をおしてはいつてきたのは、(後略)

と表現されているので、主出入口とは別に背後に扉のある可能性が感じられる。しかも、その扉は明確に内開きである。

(前略)扉にかぎをかけて、まどもみんなしめてしまい、それからセロをとりだしてあかしをけしました。

どうやら複数の窓があるらしい。図-2の復元案では左右の開口部にガラス窓を配し、両脇の出入口に挟まれた下方には突き出し窓を設けた。この面(下)は図-1ゴーシュ居住以前の現役水車小屋時代から十分な明るさと通風換気のため、板戸を横長に構え、上部に蝶番(ちょうばん・ちょうつがい)あるいは壺金(つぼがね・蝶番に代わる古来の金具)を取りつけることによって大きくはね上げて開くことができる。開放時には窓の敷居から支え棒を斜めに差し出すことによって、板戸を長時間にわたって開け放しておく。そのような形が基本であるが、つかえ棒で戸板(といた)をもち上げるのではない場合には、神社の藪戸(しとみど)と同様に大屋根(おおやね)の軒先から吊るすという方法もある。

上記文中の「あかしをけした」の“あかし”は明かりであろう。この時代に人家から離れた場所での照明器具としてはランプが考えられるが、天井から吊るすものであるか、卓上に置くタイプであるのかは不明である。後者ならば卓子(たくし)すなわち机・テーブル・食卓もゴーシュの居室に置かれているはずだが、本文からは確実に卓子の存在を証明する根拠は得られなかった。したがって図中にも表示していない。

一方、ゴーシュの家のまわりには

ねこが風のようにかやのなかを走っていくのを見て、ちょっとわらいました。

とあるので茅・萱(かや)が生えていることがわかる。そのほか前述したようにキャベツ(キャベツ)畑があり、まだ熟していない青いトマトも植えられている。

しかしながら原文には家の寸法が一切記載されていない。このため本研究では、宮澤賢治が日常的にチェロの練習を繰り返し、実際の演奏会を催した賢治ゆかりの建築物に準拠することとした。その賢治ゆかりの建築物とは、「賢治先生の家」旧・羅須地人協会である²²⁾。この建築物こそ宮澤賢治が一人で居住し、しかもチェロを演奏したゆかりの建築物なのである²³⁾。賢治は大正15年3月31日に、それまで勤務していた花巻農学校を退職。その翌日4月1日から、この宮澤家の別宅で独居自炊生活を始めた。そして同年夏に羅須地人協会を発足させる。しかし、そのように計画をしたものの改築工事は未完であった。大正15年12月には東京で正式に、専門家からチェロを習って帰宅している。

旧・羅須地人協会1階「教室」を筆者が実測調査した結果、室内の広さは真々(しんしん、柱の中心から別の柱の芯までの水平投影距離)は4556×3641mmで、一般的な表示では10畳となる。半間(はんげん)が911mmほどと考えられる。

上述のような背景から本研究においては、当該建築物の1階にある「教室」をゴーシュの家の規模決定の拠り所とした。教室の外壁近傍に水車用の河川が流れていたわけではないが、実は旧所在地である下根子桜(しもねこ・さくら、現在の花巻市桜町)の地には幅5mの川が

流れていた。その河川は現在、暗渠式になってしまったので流速と流量を測定することが出来なかった。この地へ賢治が転居して間もない大正15年9月に、その川に弥助橋を架け渡すこととなり人力を提供するとともに、彼は橋げたとなる材木を実家の山林から寄付したという事実がある。本研究では上記の河川から幅2mほどの支流を想定して復元の条件としている。

次に建築物の様相をみていきたい。

ゴージュは思わず足を上げて、まどをばっとけりました。ガラスは二、三まい、ものすごい音してくだけ、まどはわくのまま外へ落ちました。そのがらんとなったまどのあとを、
(後略)

この記述からゴージュの家が実は洋風建築ではなく、日本式の和風建築であることがわかる。

仮に当該建築物が西洋館であるとする、窓は上げ下げ窓が基本的な形である。本格的な西洋建築は石造や煉瓦造などで、ブロック状の組積単材（そせきたんざい）を下部から上方に積みあげて構築される。そのような構造方式にあっては、窓の幅を大きくとることが困難である。石材や煉瓦という塊状（かたまりじょう）の建築材料は重いため、窓を横長にすると上からの重さで崩壊してしまう恐れがある。しかし採光量を確保するために、窓の総面積は大きく取りたい。当然のなりゆきとして必然的に窓の高さを高くする。その結果、水平方向の幅は狭いが、縦に長いというプロポーションの窓になる。このような工夫によって、やっと室内の明るさが確保される。窓の上部を支える手法としてアーチが発明され、歴史的に洗練されてきた。そのアーチを架け渡す技（わざ、テクニック）という意味から、英語のアーキテクチュア（architecture, 建築作品）という語が生まれた。今日コンピューター用語では、複数のコンピュータを組織的に組み合わせる手法もアーキテクチュアと呼ばれる。また建築作品を設計（デザイン, design=元来は考案）する職能は、アーキテクト（architect, 建築家）である。

論点を窓に戻したい。縦長の窓を開閉する方法には2種類の建具が考案された。ひとつはドア式の開き窓である。片開き窓と両開き窓の両方がある。残る1種類は、2枚のガラス窓を上下にスライドして開閉する方法である。これが上げ下げ窓となる。ところが上げ下げ窓の納まりには室内側の窓枠が下方で、屋外側の窓枠は上に位置するという原則がある。その理由は部屋の中にいる人物が窓の開閉をするので、室内側の窓枠を操作しやすい高さである下側にしておくのである。

ゴージュが足を上げて腰壁（窓の下の壁面）のすぐ上の窓枠を屋外側へ蹴るのだが、仮に洋風の上げ下げ窓だとすると窓が上下にスライドする溝が室内側と屋外側の2列あるため極めてはずれにくい。この点、和風の引違い窓ならば敷居の溝・鴨居の樋端（ひばた・溝を構成する筋）・レールが1本存在するのみである。外れやすい。このように考えるとゴージュが、かっこうのために窓を蹴破ることのできる建築様式は、引違い窓：和風建築であると判断される。

なお当該建築物で疑問が残る箇所がある。それは、かっこうが入り込んできた「あな」である。こわれた水車小屋であろうとも屋根面の流れに開いているとは考え難い。降雨のたびに困るわけで、当然すぐさま塞がれよう。それで筆者は、屋根面ではなく妻面の最上部そば軒（そばのき、三角形をした壁面の軒下）あたりに小孔があいているものと想定している。あるいは屋根面が軒先側で一段低くなっている、上段の大屋根の軒下に隠れた小壁上方にあいている可能性が強い。

図-2では、今なお空回りする水車の音を耳にしながらかくが床につく。これも自然界からの音楽レッスンといえよう。就寝ではなく、水周りについて付言しておきたい。男子小便

所と大便所と農具置き場が一棟となった「おくら」が付属屋として桜町に現存する。別に井戸も存在した。風呂は賢治先生の家を見る限りでは、別棟あるいは屋外で沸かした湯を桶で、本屋に設けられた浴室に運んで入浴する形が再現されている。しかしゴーシュの入浴は、まったくの青空つまり屋外に設置された風呂桶に湯を注いでなされたものかもしれない。

IV. 水車機構の復元

順番が逆転してしまったが、ゴーシュが居住する以前現役時の水車小屋について論述する。図-1の最上部では川の水力で回転する水車の軸が、戸外から小屋内部までのびている。この水車軸は一般的に「心棒」と呼ばれる。その端部に木製の大きな平歯車（ひらはぐるま・一般的な歯車）がある。この一軸を Z_1 とする。その右側に小さな平歯車があるので、ここで回転数が増す。その小さな歯車と同じ軸に傘歯車（かさはぐるま、通常は円錐台形の特殊な歯車）が取り付けられている。この2番目の軸が Z_2 である。 Z_1 と Z_2 の平歯車の比率は25:14であるから、回転数はおよそ1.79倍まで早まる。 Z_2 と直交する Z_3 の第3の軸がある。傘歯車は、軸が直交することによって回転軸を90度変換することができる。傘歯車による力の伝達は平歯車に比べて難しさがあるので、本研究にあっては完全に同サイズとして回転数に差を生じないよう設定した。2番目の傘歯車と同軸（ Z_3 ）で小さな平歯車があり、この歯車が作業部分の太い軸（ Z_4 ）：シャフト（杵上げ軸、きねあげじく）端部の大きな平歯車をゆっくりと回転させる。平歯車（ Z_3 ）と同じく（ Z_4 ）のギア比を12:20と設定しているので、 Z_3 が1回転しても Z_4 は0.6回しか回転せず、このため上述した通りゆっくりと回る。結局、水車（ Z_1 ）が川の流れによって1回転すると、最終的に杵上げ軸（ Z_4 ）は約1.07回まわることになる。

その水平なシャフトに刺し込まれた羽根板（はねいた）あるいは単に羽根（カムシャフトに設えられた力の伝達部分）が回転することによって、杵に取り付けられた突起：カム部分（栃木県今市市の線香水車では「天狗鼻（てんぐはな）」と呼ばれる）を押し上げた後にカムが外れる結果、杵が自由落下して臼の中の穀物類を搗くことになる。さきほど水車が1回転しても作業をする杵上げ軸が1回と僅かしか回らない設定であると述べた。しかし作業効率を高めたいのならば、 Z_4 に取り付けられる羽根板の枚数を増やせばよい。図-1では一箇所1枚の板しか表示していない。これを軸の反対側にもつけて2枚としたり、120°ずつ設けて3枚羽根にすることも可能である。このような工夫によって作業の効率を高めることはできる。ただし回転数だけでなく、水量と流速によって左右されるトルク（回転力）に見合った無理のない設計をする必要がある。いずれにしても桜町の河川では流れを実測することが叶わなかったため、図-1においては力の伝達具合を示す基本概念を表した。

図中の歯車は、すべて木製を想定している。故障が生じた際も地元民の素朴な技術で修理することが可能である点が望まれる。また軸間距離によっては歯車だけでなくベルト駆動も考えられるが、回転ロスが皆無ではないし、ベルトという別な素材の調達など課題も増えよう。

建築的には左右の窓は無双窓（むそうまど）と呼ばれる二枚一組ワンセットの板製の柱間装置（はしらまそうち）である。室内側に位置する板戸を水平方向にスライドさせることで窓が明るくなる。元に戻せば板戸として閉ざされた状態となる。

建築物そのものではないが、今回の研究で触れなかった事項がある。それは窓から見える月の満ち欠けと方角の関係である。季節と時刻と方角の関係性を深めていけば、当該建築物の方位と開口部の正確な位置を特定することができる可能性が残されている。

IV. む す び

これまで述べてきたように本研究では、セロ弾きのゴーシュが住む元・水車小屋の新旧平面図を復元した。今日的な技術上の視点からみても、さまざまな項目で無理のない合理性を有する興味深い結果を得ることができたと考えている。ゴーシュの家は、今日ならばワンルーム型リビングと称される居室であった。

本研究を進める諸段階で御指導、お力添えを頂戴した方々は決して少なくない。衷心より感謝申しあげる次第である。賢治母堂の実家ご当主でいらっしゃる花巻の宮澤啓祐商工会議所会頭、賢治の母校盛岡中学校の後身である岩手県立盛岡第一高等学校同窓会の佐々木茂喜博士(医学)からは永年にわたって御指導を賜っている。「賢治先生の家」実測調査に際しては岩手県立花巻農業高等学校ならびに同窓会に、ひとかたならぬ御世話になった。賢治のチェロに関しては宮沢賢治記念館の牛崎敏哉副館長、そして水車の復元・考案に際しては産業考古学会の天野武弘先生ならびに中部産業遺産研究会の市野清志先生より多大なる御教示を頂戴した。さらに北海道立図書館と北翔大学図書館の蔵書からも多大な情報を与えられた。また「ゴーシュの水車小屋」平面図2葉の印刷をする際には、本学の版画室とプレス用ローラーを使わせていただいた。末尾となってしまったが心からの謝意を表するものである。なお本研究を継続することができた背景には、北翔大学北方圏学術交流センター通称ポルトから特別研究費をお認めいただいたという事情がある。重ねて感謝するものである。

注

- 1) 「宮沢賢治 略年譜」, 『宮沢賢治・詩と絵の宇宙 雨ニモマケズの心』, 監修: 天沢退二郎, 編集・制作: アート・ベンチャー・オフィス ショウ, 発行: アート・ベンチャー・オフィス ショウ, 2012年, P-187による。
- 2) 「宮沢賢治との出会い」, 『生誕百年 新美南吉』 編集・発行 新美南吉記念館, 平成24年3月, P-26
- 3) 「人と作品」朝倉宏哉, 『日本の詩 石川啄木』 編者 朝倉宏哉, 発行所 ほるぷ出版, 昭和50年12月1日, P-381
- 4) 「セロひきのゴーシュ」宮沢賢治, 『風の又三郎』 宮沢賢治, 圖畫 小穴隆一, 羽田書店, 昭和14年12月20日, 『名著復刻 日本児童文学館』 宮沢賢治 著, ほるぷ出版 刊, 昭和46年1月
- 5) 「セロ弾きのゴーシュ」宮沢賢治, 『スクール文庫 宮沢賢治童話選 猫の事務所』 宮沢賢治 著, 市村広 編, 佐伯義郎 画, 蓼科書房, 昭和24年6月5日, 『復刻版』 発行所 シグロ, 1999年6月30日
- 6) 「セロひきのゴーシュ」宮沢賢治, 『日本児童文学全集 10 セロひきのゴーシュ』 著者 宮沢賢治, 挿絵 遠藤てるよ, 発行所 偕成社, 昭和37年6月15日
- 7) 『セロひきのゴーシュ』 作者 宮沢賢治, 画家 茂田井武, 福音館書店, 1966年4月1日。
「ある絵本作家の軌跡 茂田井武」, 『別冊太陽 日本のこころ 45 絵本』 編集=高橋洋二・久田肇・岡みどり・澤田陽子, 発行所=平凡社, 1984年3月25日, P.59-66。
「茂田井武との出会い」松居直, 前掲『別冊太陽 日本のこころ 45 絵本』 PP.67-70
- 8) 「セロひきのゴーシュ」作・宮沢賢治, 『日本の幼年童話 2 セロひきのゴーシュ』 作・

- 宮沢賢治，表紙・口絵・さし絵＝おきの がく，岩崎書店，1972年2月28日
- 9) 「ゼロひきのゴーシュ」著者 宮沢賢治，『ゼロ弾きのゴーシュ 宮沢賢治童話集 偕成社文庫2019』著者 宮沢賢治，カット 田代三善，偕成社，1976年7月
 - 10) 「ゼロひきのゴーシュ」著者 宮沢賢治，『ゼロひきのゴーシュ 新版・宮沢賢治童話全集 8』編集 宮沢清六・堀尾青史，装幀 安野光雅，カバー・口絵・さし絵 太田大八，岩崎書店，1978年12月20日
 - 11) 『画本 宮澤賢治 セロ弾きのゴーシュ』作 宮澤賢治・画 小林敏也，パロル舎，1986年7月24日
 - 12) 「ゼロ弾きのゴーシュ」画 山川直人，『賢治礼賛 イーハトーブ・モダン画帖』原作 宮沢賢治，画 山崎克己 オオノサトシ 内田かずひろ 山川直人 鈴木おれんじ 古谷トシタカ，LYU工房（りゅうこうぼう），1996年8月27日，P-69
 - 13) 『ゼロひきのゴーシュ』著者 宮沢賢治，画家 小野かおる，古今社，2003年11月30日
 - 14) 『ゼロ弾きのゴーシュ』作 宮澤賢治，版画 畑中純，響文社，2005年8月5日
 - 15) 『ゼロひきのゴーシュ』宮沢賢治／作，いもと ようこ／絵，金の星社，2005年12月
 - 16) 「ゼロ弾きのゴーシュ」著者 宮沢賢治，『21世紀版 少年少女日本文学館 ⑧ 銀河鉄道の夜』著者 宮沢賢治，挿画 野村俊夫，さし絵 徳田秀雄，講談社，2009年2月26日
 - 17) 『まんが日本の文学 注文の多い料理店 セロ弾きのゴーシュ 猫の事務所』原作 宮沢賢治，漫画 湖東美朋，金の星社，2011年1月
 - 18) 「ゼロ弾きのゴーシュ」名倉靖博，前掲『宮沢賢治・詩と絵の宇宙 雨ニモマケズの心』，PP.132-133
 - 19) 『ゼロ弾きのゴーシュ』宮沢賢治／作，さとう あや／絵，発行所／三起商行，2012年10月17日
 - 20) 『別冊宝島2453号 本当の幸せとは－宮沢賢治・修羅の哲学 宮沢賢治という生き方』編集長 田村真義，編集 山田桐子，イラスト 柴田美里，宝島社，2016年6月13日
 - 21) 『版画絵本 宮沢賢治 セロ弾きのゴーシュ』文 宮沢賢治・画 佐藤国男，子供の将来社，2016年12月17日
 - 22) 「賢治先生の家・羅須地人協会の現状」拙稿，『日本建築学会北海道支部研究報告集No.87』日本建築学会北海道支部研究報告集編集委員会 編集，日本建築学会北海道支部 発行，2014年6月発行，PP.393-396。
「旅 見る 聞く 探す 賢治先生の家 イーハトーブ夢見た拠点」，『北海道新聞』北海道新聞社編集部 編集，北海道新聞社 発行，2009年（平成21年）11月29日発行，PP.1-2。
「賢治先生の家（羅須地人協会）について」岩手県立花巻農業高等学校，「賢治先生の家が花農に存在することの意義」照井謹二郎，『羅須地人ニュース（特集号）』発行所 岩手県立花巻農業高等学校同窓会，発行日 平成8年4月1日
 - 23) 「羅須地人協会の床板についての報告」戸山 正，『宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報 第40号』編集 宮沢賢治学会イーハトーブセンター編集委員会，発行所 宮沢賢治学会イーハトーブセンター，2010年3月31日，PP.21-25